

## 2 野 菜

項 目	作 業 内 容																
<p>(1) 梅雨期の排水対策</p> <p>(2) 果菜類の追肥</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○梅雨期の排水対策</li> <li>○果菜類の追肥</li> <li>○きゅうりの管理</li> <li>○トマトの管理</li> <li>○さといもの追肥・土寄せ・疫病防除</li> <li>○貯蔵用たまねぎの収穫・乾燥</li> <li>○いちごの炭疽病防除</li> </ul> <p>梅雨期の大雨等で土壤水分が過剰になると、土壤中の気相（空気）が小さくなり、根の活力が低下し、生育が抑制される。</p> <p>湿害対策として、うね間や側溝・排水溝の土を除去し、雨水がほ場外へすみやかに排水されるよう排水溝を設置するなどのほ場全体の点検を行う。</p> <p>今後、作付けする野菜は、排水の悪いほ場ではできるだけ高うねとする。また、堆肥等をあらかじめ施用し、土を膨軟にしておく。</p> <p>マルチ被覆は土の物理性、土壤水分、肥料分の保持や、豪雨による土の流亡、土の跳ね上がり防止等に有効である。</p> <p>6月はきゅうり、なす、ピーマンなど、5月に定植した果菜類の収穫が始まる時期である。これらの果菜類は、茎葉の伸長（栄養生長）と開花や果実肥大（生殖生長）が同時に進行しており、バランスのとれた生育をさせることが良品多収生産につながる。このため、生育に応じた肥培管理、着果負担の軽減等に努める。主な野菜の追肥目安は下表のとおりであるが、天候や生育状況により、追肥の時期・量を加減する。</p> <p>また、根傷み等で根から養分を吸収できない場合は、1,000倍程度の液肥（尿素液等）を葉面散布すると効果的である。</p> <p style="text-align: center;">表1 主な果菜類の追肥施用の目安</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 20%;">作物名</th> <th style="width: 25%;">追肥開始の目安</th> <th style="width: 20%;">追肥の間隔</th> <th style="width: 35%;">1回あたり 施用量</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>きゅうり</td> <td>1番果収穫前</td> <td rowspan="5" style="text-align: center; vertical-align: middle;">7～10日 おき</td> <td rowspan="5" style="text-align: center; vertical-align: middle;">N成分で 2～3kg/10 a</td> </tr> <tr> <td>なす</td> <td>1番果収穫始め</td> </tr> <tr> <td>ピーマン</td> <td>1番果収穫始め</td> </tr> <tr> <td>トマト</td> <td>1段花房の果実がピンポン玉大時</td> </tr> <tr> <td>ミニトマト</td> <td>3段花房開花時</td> </tr> </tbody> </table>	作物名	追肥開始の目安	追肥の間隔	1回あたり 施用量	きゅうり	1番果収穫前	7～10日 おき	N成分で 2～3kg/10 a	なす	1番果収穫始め	ピーマン	1番果収穫始め	トマト	1段花房の果実がピンポン玉大時	ミニトマト	3段花房開花時
作物名	追肥開始の目安	追肥の間隔	1回あたり 施用量														
きゅうり	1番果収穫前	7～10日 おき	N成分で 2～3kg/10 a														
なす	1番果収穫始め																
ピーマン	1番果収穫始め																
トマト	1段花房の果実がピンポン玉大時																
ミニトマト	3段花房開花時																

項 目	作 業 内 容
(3)きゅうりの管理	<p>きゅうりの葉は、展開後 45～50 日程度で光合成能力が低下するため、重なり合った古葉や病葉を適宜除去する。目安は、1 回の摘葉で株あたり 1～2 葉である。また、下葉の 3～4 枚は主枝を摘心する頃までに摘葉し、株元への採光を良くする。</p> <p>なお、草勢低下が見られる場合は、変形果や傷果を中心に摘果するなどして着果負担を軽減する。</p> <p>病害は、多湿条件ではべと病、褐斑病、炭疽病が、乾燥条件ではうどんこ病が発生しやすい。排水、通風、採光環境を良好にするとともに、発病葉の早期発見・適期防除に努める。</p>
(4)トマトの管理	<p>トマトは強い光を必要とする野菜であり、晴れの日が続くと順調に生育するが、雨天や曇天が続くと光合成量が低下し、落花する原因となる。このため、1 花房に 3～4 つ開花した頃にトマトトン 100 倍液を散布し、着果を促進する。</p> <p>降雨が続くとトマトでは疫病、すすかび病、葉かび病、灰色かび病が発生しやすくなる。晴天日に腋芽除去や、収穫果房より下の葉を摘葉し、風通しを良くする。かいよう病菌が傷口から侵入しないよう、ハウス栽培では通風を改善して湿度を下げ、管理作業による伝搬を防ぐ。また、灰色かび病の発生源とならないように、咲き終わった花弁を丁寧に除去する。</p>
(5)さといもの追肥・土寄せ・疫病防除	<p>さといものマルチ栽培では、6 月中旬頃を目安にマルチを除去し、追肥、土寄せを行う。1 回あたりの追肥量はチッ素成分で 7 kg/10 a 程度とし、8 月中旬頃までにもう 1 度施用する。</p> <p>マルチ栽培では、根がマルチの際まで伸長しているため、この時期の土寄せは根を傷めやすい。このため、作業はなるべく曇天時に行い、土寄せ後の夕方に適宜かん水する。</p> <p>土寄せする土の量(高さ)は、新葉が出てくる部分より低くするものの、株元まで十分に行い、かまぼこ型でボリュームのあるうねにする。</p> <p>全期マルチ栽培(栽培期間中にマルチを除去しない栽培)であれば、6 月中旬頃に土寄せの代わりに株元へマルチ上から軽く土入れし、子芋からの出芽を促進させる。</p> <p>病害面では、疫病の発生に注意する。発病前からジーファイン水和剤、ペンコセブ水和剤を定期的に散布し、初発が認められたら発病葉を除去してダイナモ顆粒水和剤を、その後はアミスター20 フ</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>ロアブルを散布する。</p> <div data-bbox="496 340 1339 748"> </div> <p>写真1 さといも疫病の病徴</p> <p>(6)貯蔵用たまねぎの収穫・乾燥</p> <p>たまねぎは茎葉が倒伏した後も肥大するが、貯蔵性を考慮し 70～80%程度の茎葉が倒伏した頃に収穫する。晴天が続く日を選んで収穫し、葉の切り口を乾燥させてコンテナに7分目程度詰め、ハウス内に搬入する。腐敗球の発生を軽減するため、搬入後1～2週間は 40～45℃で早期に乾燥させ、その後は 30～40℃管理とする。温度が 50℃以上になると、品質が著しく低下するため、置き場所等に留意する。首の部分や根がカラカラに乾けば乾燥終了であり、風通しの良い、温度の低い倉庫などで保存する。</p> <div data-bbox="1007 920 1374 1205"> </div> <p>図 たまねぎの乾燥</p> <p>(7)いちごの炭疽病防除</p> <p>いちご炭疽病は、降雨や頭上かん水により、罹病苗に付いた水滴によって胞子が飛散し、感染が拡大する。</p> <p>6月は親株床で採苗が行われる時期であるが、梅雨入りの時期でもあるため、親株や子苗の定期的な防除及び発病株の早期除去に努める。</p> <p>育苗床での炭疽病蔓延を防ぐには、雨よけハウスでの底面給水育苗が有効である。併せて、うどんこ病の初発(新葉の葉裏や柔らかいランナー上の発病)を見逃さず、徹底した適期防除を行う。</p>

項 目	作 業 内 容
	 <p data-bbox="710 808 1129 846">写真2 いちご炭疽病の病徴</p>

(作成 農林水産研究所)